熊熊通信

財政破綻後の夕張医療事情

北海道医報通信員
夕張市医師会　理事
南清水沢診療所　院長
立　花　康　人

⑴医師会の変化について

夕張の財政が破綻し医師会も大きく変化した。それは会員数が大きく減少したことだ。破綻前は19名であったが11名まで減少し、さらに転居、高齢化などにより現在は7名となり、道内の医師会のなかでも最小の規模となってしまった。

また破綻の影響で市からの補助が全くなくなり、収入が以前の約1／2まで減少し運営することも困難な状況となった。そのため医師会費の引き上げ、休日、夜間当番の補助金の全額拠出、賃貸で借りていた事務所を引き払い、築詰会長のご厚意により医院の一室へ転居することなどで切り盛りしている。このような状況であるため医師会の活動自体も停滞し、今後の医師会の方向性を考えなければならない時期にきているのかもしれない。

⑵医療の変化

破綻後、最も変化したことは救急医療である。私は縁あって平成17年1月より現在の診療所へ勤務となった。市立病院の当直医が足りないとのことで、週1回程度当直勤務をしていた。救急隊などからの要請があればほぼすべて対応していた。破綻後、夕張市立病院の診療所化に伴い市内に救急医療指定病院は無くなり、受け皿は市立診療所も含め5医療機関が担うこととなった。日曜の休日当番、平日夜9時まで各医院が分担し救急の受け入れを行っているが、それ以外にも救急隊の要請があれば対応できる医療機関で受け入れている。高齢化が進む夕張では重症例も多く、時間外では市立診療所以外はほぼ1人で対応しているのが現状である。そのため心理的にも、肉体的にも負担が大きい。市内で対応ができない場合、30分から1時間程度でアクセスできる2次病院へお願いし、場合によっては救急車に同乗し搬送している。日中であればドクターヘリ運航の範囲内であるため、連携しながら搬送していただくこともある。

連携病院は夕張近郊に多く、内科、小児科、脳外科などにお願いすることが多いが、遅い時間にも関わらず依頼するとほとんど断りもなく快く引き受けて下さる。普段激務をこなし、当直明けを保証されていない先生に依頼することは本当に心苦しい限りで、いつも感謝の気持ちで一杯である。夕張市医師会を代表しこの場を借りてお礼を述べたい。

地域医療と人口問題

夕張市医師会　理事
夕愛クリニック　院長
岡　田　　学

私が夕張市にて開業し、はや五年目にさしかかりました。この間、周囲の状況も変化し続け、想うこともいくつかありました。

まず、最近「地域医療の崩壊」ということが叫ばれていますが、それを語る前に地域自体の枠組みを考え直さないといけない時期にきていると思います。現在の日本におけるコミュニティと人口の分散は一次産業も含めた自然な経済的流れに伴って形成されたものだけではなく、国レベルで関与された恣意的な分散であることも多いようです。現に地方にいると「多くの役所と公共事業を存続させるために多くの自治体がある」という現実を直視せざるを得ないこともあります。そしてこのような自治体が各々病院を建ててきたわけで、その全てを維持するのは困難でしょう。

そして将来の日本が抱える最大の問題として年代別人口比の逆ピラミッド現象が挙げられます。若年者に対し高齢者が多くなり、その結果老年従属人口比率、つまり一人の労働可能な成人が面倒をみなければならない高齢者の人数が増え、将来の若年層の負担は今の倍以上になるそうです。

こういった未来像に対し、国は在宅での医療や介護の推進という方針を示しています。それは家族が中心になって高齢者の介護等をしなければならないことであり、このままでは若年層の労働力を消耗し、この国の経済活動は麻痺しかねない、との意見もあります。

それに在宅介護が促進されてから、救急の現場が在宅から入院への窓口になってしまい、大幅に負担を増やすことになってしまったように思うのは私だけでしょうか。

医師会ではかねてからこの問題を指摘し、長期療養病床の必要性を訴えてこられたと思いますが、現時点ではおおむね正当だと思います。今日正しいことが明日には間違っているかもしれない状況で、その時々の社会的変化に応じてどうすればわれわれの社会が維持できるのか考えなくてはいけないのでしょう。